



教職員大会における派遣審判員制度は、1999年第38回青森大会から導入されました。私はその時の派遣審判員の1人でした。この制度が他の連盟組織にない、先見性を持った意義ある取組であることは言うまでもありません。これがどのようにして生まれ、発展してきたか、当時の教職員連盟の組織内では多くの時間を割いて検討されたことと思いますが、私は導入された制度に審判員として参加し、私なりの思いで関わってきたことを振り返ってみます。

当時、高校の教員としてバドミントン部の顧問、指導者となった時、県大会の試合では審判は生徒による負け審制から教員が行うこととなっていました。そして、私は神奈川県審判員の地区代表として、地域の学校の顧問の先生方にルールや審判方法を示していく立場にいました。県のバドミントンのルールブックの教本編集にも携わり、その時のまとめ役が、国際審判員だった神奈川の今井正男先生でした。その今井先生は、長いこと教職員大会の競技役員長として、大会のまとめ役をされていましたが、青森大会からは審判員を専門でやっていく制度を取り入れたいと、私に協力を求めてきました。それまでは、日本教職員バドミントン大会は、「負け審」制度だから、日本の一種大会なので、審判は公正な立場でできる人で運営していきたいとのことでした。そこで今井先生の新たな取組に賛同し、派遣審判員制度と言う、全国から公認審判員を集い、地元の審判員とともに大会を運営することに大きな意義があると感じたものです。全国から原則1級の資格を持つ優れた審判員の方々と交流を持ち、審判技術の普及にも貢献すると言う、教職員連盟らしい取組が始まりました。私は4年間派遣審判員として大会に参加しましたが、5年目より連盟の理事の任に就いたために、アンパイアはできなくなりましたが、競技審判部長として、競技役員長の補佐をしながら、大会の運営方法を学び、ながら、またレフェリー制度が導入してからも、ともに派遣審判員の方々の協力を求めながら、審判会議において、あるいは競技が終わった日々の反省会において、多くの派遣審判員の方々とともに学んできました。参加者は互いに教示しあい、アドバイスを与えあって成長してきました。審判員の初心者の方々をはじめ、その技術の向上と交流にこの制度は寄与しています。

長く続いている派遣審判員制度ですが、だいぶ規模が大きくなってきました。年によっては、一大会で40名をこえる全国からの協力を得ましたが、何ごとも経費がかかるもの。審判積立金の予算を上回る事態になり、現在は相対的に縮小する方向で、参加人数を制限しています。公認審判1級の資格保有者、かつ原則全日程、または3日間参加できる方に限らせていただく方向にあります。

しかし、この派遣審判員制度は、審判技術の伝播、普及の大会の試合という、現場で体験しながらの学びの場でもあり、選手の方々からすると、公正で正しいジャッジをしてくれる頼もしい方々です。オリンピックやジャパンオープン、全日本総合などの審判を経験された方もおり、今後の審判技術の普及に今後も貢献していくものと思います。全国の審判員の人数は、年々量的には増加傾向にありますが、審判技術の質は別物です。長年、この制度に協力していただいている審判の方々は、その意義に賛同して協力いただいております。ささやかながらも表彰をさせていただいています。地道ではありますが、日本のバドミントンの発展のために寄与しているこうした審判員に光を当てていただけたならば幸いです。

目次	巻頭言
	平成二十九年 総会資料
	総会議事録
	平成二十八年度事業報告
	平成二十八年度決算
	平成二十九年 事業計画
	平成二十九年 予算
	派遣審判員について
	第七回全日本教育系学生大会要項
	第五十六回大会資料
	今大会を顧みて
	レフェリー報告
	平成二十九年度表彰者一覧
	総合順位
	成績表
	団体戦 トーナメント表
	個人戦 トーナメント表
	表紙の人
	派遣審判員一覧／閑話休題